

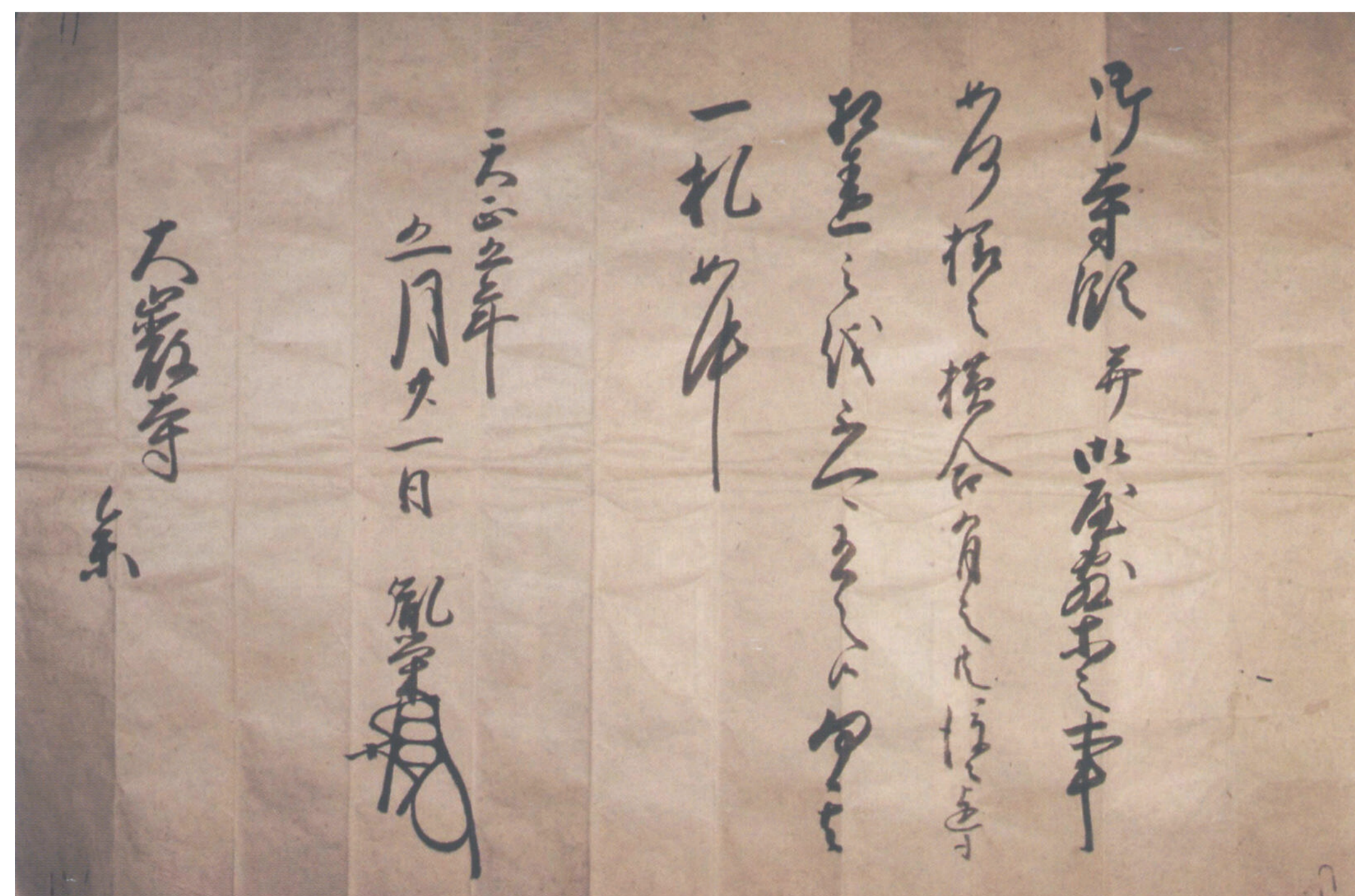
千葉氏家宰・原胤栄夫妻により開かれた学問寺

大巖寺は浄土宗の寺で、戦国時代の天文年間（1532～1555）、千葉氏家宰（重臣筆頭）で小弓（生実）城主の原胤栄夫妻が、道誉貞把を開山として創建しました。胤栄の妻の病を癒したことから、妻が貞把への信仰を深め、城の北方にこの寺を建てたと伝わっています。

この頃、本佐倉城（佐倉市・酒々井町）に本拠を移した千葉氏に代わり、原氏がこの辺りを含む小弓地域を治めていました。天正5年（1577）に、胤栄が大巖寺に対して領地と屋敷を安堵（保証）すると記した古文書が残っています。



道誉上人座像(左)と原胤栄夫人座像(右) 大巖寺蔵



大巖寺文書 原胤栄判物 大巖寺蔵

小弓地域は、湊に近く主要な街道も通る水陸交通の要地だったため、しばしば奪い合いの対象となりました。この7年前には安房国（千葉県南部）の里見氏に奪われましたが、この古文書から、胤栄が小弓地域を取り戻したことがわかります。

天正18年（1590）の小田原合戦で北条氏が敗れると、北条氏に味方した原氏も豊臣秀吉に滅ぼされました。しかし、大巖寺は徳川家康の保護を受け、江戸時代には関東十八檀林（浄土宗の僧侶養成所）の一つとして栄えました。本堂とともに国登録有形文化財となっている書院は、浄土宗の学問と教育の場としての雰囲気をも今に伝えます。